



『お金は寝かして増やさない』で 伝えたかったこと

対談：水瀬 ケンイチ 氏、岡本 和久
レポーター：佐藤 安彦

継続するために必要な知識とは

岡本：今回、水瀬さんが書かれた『お金は寝かして増やさない』について教えてください。「寝る子は育つ」という言葉がありますが、ただ寝ているだけではなく、ちゃんと栄養を与えると本当に育っていくということだと思えます。ずいぶんと増刷されていると聞きましたが、今どれくらいなのでしょう？

水瀬：つい先日、「第6版で公称5万部になりました」と出版社から連絡がきました。

岡本：どんな人が読んでいるのか聞いていますか？

水瀬：編集の方からは、投資本は首都圏だけでよく売れて地方があまり売れないというケースが多々あるようですが、この本に関しては、全国満遍なく売れていると聞いています。

岡本：それは良いことですね。水瀬さんのブログを見ている方が買って読んでいるというのもあるかもしれませんね。

水瀬：最初はほとんどがそうだと思います。でもだんだんとなのですが、読んでくださった人の記事やブログの書き込みを見てみると、「良い本だったので家族に紹介します」とか、「後輩に一冊買って渡してやりました」とか、広げてくれている人もいます。

岡本：タイトルに寝かすという言葉を使ったように、時間というものを正面から取り上げていてそれがすごく大きなポイントだと思いますが、この本で一番訴えたかったことは何でしょうか？

水瀬：長期・分散・低コストという話はもちろんなのですが、それよりも、自分がインデックス投資を15年間やってきて、教科書通り右肩上がりの資産の増え方にはならず、山あり谷ありだっ



長期投資仲間通信「インベストライフ」

たのですが、谷の時に止めないこと。継続するということが一番言いたかったです。そして、続けるためには、経済や世の中の仕組みが、ある程度でも分かっていた方がよいし、資本主義経済がどうやって回っているのかを、ざっくり理解して腹に落としておくと、続けることができるんじゃないかと思います。

投資リターンの源泉とは

岡本:なるほど。確かに最も重要なことですね。時間を味方につけるというのは、あの本でも重要なテーマになっていますが、時間を味方につけるためには、まず株式会社というものの仕組み。それから一步進めると、株主になるというのはどういうことなのか。あるいは、株式を投資することに対する収益の源泉がどういうところにあるのか、そういった事を理解した上であれば、非常に長期間であっても長い道中にも耐えられるでしょう。

グローバルな株式インデックスであれば、グローバルな経済成長率程度のリターンを得ることができるであろうと、その一点を確信するか、しないかの問題なんだと思います。それで、確信したら始めること。あとは、続けるということですね。実際、始めることより、続けることの方が難しいですね。



水瀬:おっしゃる通りだと思います。リターンの源泉は何か、会社の収益とは何か、そしてそれが拡大再生産を繰り返すとはどういうことなのか。経済学の教科書には書かれているので、知識として知っている方はいると思いますが、インデックス投資を15年間やってきた中でそれを実感しました。

これは、身近な事で本にも書いたのですが、会社員として働いている中で事業計画を立てる時には、景気の良し悪しに関わらず、必ず前年同期比はプラスを立てさせられるんですよね。マイナスでよいという話には絶対にならない。

こういった自分が日々やっている仕事の中でも、経済というのは成長を続ける方向に作られているのだと実感できるということを書きましたし、リーマンショック後、株の大暴落の最中に本屋に行った時、悲観的なタイトルの本が山積みされているのを見て、一山当ててやるとい



長期投資仲間通信「インベストライフ」

う著者や出版社の商魂の逞しさを感じて、そういう身近なところから、経済って止まらないんだな、成長を続けるんだな、と実感することができました。

岡本:ある意味、アダム・スミスの見えざる手というか、欲望が源泉になって成長を続けているのだと思います。時間という話をした時に、すぐに複利ということで72の法則などの話になるんだけど、むしろその前に、企業の収益が内部留保されて、それが収益を更に拡大するという点での複利が強調されるべきだと思うんですね。

水瀬:商品ではなくて、投資先の企業の実態の話ですね。

岡本:そうです。内部留保されたお金が、それまでの事業よりもROEの高い分野に設備投資されることによって、ROEを更に高めて成長率を上げていく、そういう事が72の法則の話として数字だけを見せてしまうことで欠落してしまっているのだと思います。
銀行にいくら預けるとこれだけ増えるのに何千年かかるみたいな話になってしまうけれど、企業の成長の話をすると違いが分かってくると思います。そうすると、日本の多くの企業がやっている、内部留保を銀行預金に預けていることが、いかに愚かなことなのかというのも、だんだんと分かってくる気がしています。

水瀬:内部留保ばかり溜めているのは、けしからんから全部吐き出させろという新聞の論調が凄かった時期がありましたが、会社の未来の成長のために使う大切な資金なので、それを全て吐き出して労働者に配ってしまったら成長できなくなってしまう、そういう誤解がいまだにあるので、内部留保についてももっと正しく知られるべきですね。

岡本:そうなんです。だから、逆に言うと、企業が何の目的もなく預金にしか入れていないとしたら、それは問題ですよ。預金にしておくのなら配当金を払ってくれとなりますよね。内部留保は、高い成長が見込まれる分野を見つけてきて、リスクを取って投資をする、そういう使われ方をされるべきだという議論になっていけばよいと思っています。
先ほどの本屋の話で、どんな時も企業はしぶといなと感じる部分がありますが、全く同じような話で、朝、太陽が昇って世の中を明るく照らしますね。だけど、雨の日は太陽が昇ってくるのが見えない。だけど太陽はそこにいて働いているんですね。
それと同じで、株式市場がどしゃぶりの時も、企業は企業で働き続けているんですね。そこで付加価値を生み出して、我々みんなの生活を支えてくれているので、そういう意味でもうちょっと投資というものを株価という数字のゲームではなく、実態経済というか、企業活動の方に近づけていく必要があると考えています。

水瀬:今回の本でも、最近のインデックス投資解説本は分かりやすく書いてあって、「インデックスファンドを買って持っているだけでよいのです、以上」という内容になっていて詳しい説明が



長期投資仲間通信「インベストライフ」

省かれた作りになっているものも目につきます。それはそれでよいと思うのですが、そういう本ばかりにならずに、今おっしゃられたような投資先企業や、企業が構成している経済みたいなものに考えを踏み入れてもらうと必要ですね。

骨太な部分に意識を向けると、暴落に対する投資家としての胆力というか耐久力みたいなものが増しますし、実際の仕事にも役に立ちます。投資を勉強するために、自然に経済や会社の仕組み、もう少し細かくみると内部統制やマーケットの制度や規制みたいなものも分かってきて、投資が仕事にも繋がっていったりするので悪いことではないと思うんですね。そういう効果も含めて、もう一步踏み込むための入門本になればよいなと思っています。

なぜ、インデックス運用なのか

岡本:これまで、どちらかという企業に目を向けた話をしていました。でも、なぜ、インデックス投資なのかという部分について、どういう原動力というか、理由付けを聞かせてください。

水瀬:やはり、ここで出てくるのはリスクなんですね。個別企業に投資をすると、インデックスのような分散されたポートフォリオではなくなりますね。資本市場では、強いものが伸びて弱いものは沈んでいくという淘汰が繰り返されているんですけど、万が一、自分が投資した先がハズレの企業だったとして、投資したお金が老後資金だった場合のダメージは計り知れないです。

それを避けるための知恵として分散投資が出ています。それを日本国内だけでなく、アメリカ、ヨーロッパ、中国、インドなどにも分散したいとなってくると、インデックスというのは非常に便利だし、その上、低コストなんですね。

岡本:今のお話でとても良いなと思うのは、分散というのが、株価の分散ではなく、ビジネスの分散効果であるという事ですね。多くの人が株価のブレ幅を小さくするために分散投資をしますが、それよりも、まず、ビジネス・ポートフォリオの分散が重要であるとずっと思っているので、そういう意味で、我が意を得たりという気がしました。

水瀬:上手くいく会社と上手くいかない会社が出てくるのは当然です。全部が上手くいくことはないのですから。

岡本:そうですね。これから先に成長しそうな分野や企業はあるのだけれど、長期投資を考えたときに、それだって次々と変わっていくのでどうしてもアクティブで超長期の投資をしていると鮮度が落ちてしまう。鮮度を落とさないためには、今、良いものを買うだけでなく、ずっと持てるものを買う必要がありますね。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

水瀬: 個別銘柄の寄せ集めを持っていたとしても、それを新陳代謝させずにずっと持っているだけだとすると、ビジネスが時代遅れになってしまうケースを避けることができなくなると思います。そういう意味で、インデックスという指標に連動するビジネスを持つというのは便利ですね。

なぜ、グローバルなのか

岡本: インデックスというと多くの方が、NIKKEI ですか TOPIX ですかとなって、日本という所から逃れられないのですが、そこからグローバルという発想に行くには、どういう論点が必要でしょうか？

水瀬: 実は皆さん実感を持っている事だと思いますが、少子高齢化が進んでいて若者が少ないことや、ベンチャースピリットが、アメリカや中国の若者と比べて低いとか、挑戦できない社会だとか、出る杭は打たれる社会だとか、日本についてネガティブな事を言い出したら枚挙に暇がないくらいに出てきますね。

実際にはそれがどう作用しているのかわからないのですが、そんな息苦しい世の中は飛び越えてしまいたいですね。でも人間が海外に引っ越したり、海外で就職したりするのはなかなか大変ですが、お金は自由に働きに出て行けるので、アメリカでもヨーロッパでもどこでも好きに働いて貰いましょうよ、という考えです。

日本の中だけにいる閉塞感から、お金だけは自由になれるよということで、海外にも投資をしましょうという話をしています。あと、分かりやすい話だと、私たちは生活でアマゾンやグーグルを日常的に使っていますよね。服もブランドはいろいろありますが、中国で作られているものも多いです。そう考えると、日本の製品や日本のサービスに特化する必要はないですよ、という話をしています。

インデックス運用はおかげさまの投資

岡本: 我々の日常生活は世界中の企業によって支えられています。世界の中のごく一部でしかない日本企業だけで成り立っているわけではないし、アメリカだけ、中国だけに支えられているわけでもない。例えばスマートフォンの場合、原材料まで辿っていったら世界中に広まっているんだと思います。要するに、世界中の企業のおかげで我々は生活ができているんだということになりますね。そう考えるとインデックス投資というのは、おかげさまの投資と言えると思います。

水瀬: そうです。おかげさまなんですよ。皆さんの頑張りの結果なんだと思います。

岡本: 逆に個別銘柄への投資は、応援です。おかげさまと応援、もちろん両方あってよいと思います。おかげさまというのは、かげで支えてくれている部分に対して、「お」と「さま」を付けて、



長期投資仲間通信「インベストライフ」

「おかげさま」になっていますね。そういう意識というのは日本人の中にあるのだと思います。ですから、インデックス運用というのは、日本人の感性に合っているのだと思います。

水瀬: インデックスは仕組みや技術は西洋的ですが、考え方は日本的ですね。岡本さんの言葉を借りれば、和風投資なんだと思います。

岡本: 和風投資にはすごく良い言葉があって、「知足」というのは、あまり大きく収益を求めない、人の収益まで持ってきて、プラス・アルファを得ようということではなくて「足るを知る」ことが大切だという教えです。「分限」というのは、自分が投資をしている金額(分)を限度として投資収益を得るという考えですし、「永代」は長期投資ということですね。「積小為大」という言葉は、小を積んで大を為すという意味で、まさに積立投資です。

水瀬: それは、ドルコスト平均法ですね。

岡本: はい。まさにその通りかもしれませんね。そういう意味でもインデックス投資というのは日本人のメンタリティに向いているのだと思います。

ところで、よく定年退職までにいくらあれば足りるのかという話が出てきますが、これについて、水瀬さんはどうお考えですか？

退職時にいくら必要か

水瀬: これは人によって結構違いがあるので、一般化して話すことが難しい話題だと思いますけど、私は、定年退職よりも一年でも二年でも早く卒業をする、早期リタイアという形を目指しています。そのためには生活資金が必要になるので、他の方が考えているよりも若干多く設定をしているんです。

ただ、先ほど、足るを知るという話がありましたが、お金は有れば有るほどよいに越したことはないのですが、自分がどういう状態にあると幸せを感じるのかというのを、20代の後半からずっと考えていて、自分はそんなにお金を掛けなくても幸せになれるということが分かってきました。

例えば、今日のように友人知人と、お茶を飲みながら話をするのもそうですし、近所を探索して歩いて、四季の移り変わりを見るだけでも十分に楽しいなと感じられることを考えると、自分には、そんなに大金は必要ないのだと思っています。

岡本: 最近いろんな所でいろんな人が、3,000万だ、5,000万だ、いや、1億だとか、勝手気ままに言っているけれど、仮にそれを5,000万と決めたとしても、その5,000万を確実に得られるかな



長期投資仲間通信「インベストライフ」

んて分からないわけですし、得られなかったからといって、その人の人生はもうダメなのかというとなんか事はないですよ。

要するに、退職するまで一生懸命に働いて、節約して、まともに投資をして、例えば65歳で定年を迎えたとしたら、その時をひとつの基準点として考えて、その時点で保有する資産で残りの人生を生きていく以外、どうしようもないですよ。つまり、与えられた資金の中で、幸福感を最大にする最適化の問題になってくるんです。

その最適化の要素の中に、家族、友人、知人があったり、あるいは趣味や、社会貢献などがあるわけで、それらを最適化するだけなんです。そう考えると、老後にはいくら必要で、そのためには、今すぐ株式投資を始めましょうという言葉にすごく抵抗感を感じるんですよ。

水瀬: 投資本の見出しや取っ掛かりには、いくつかのパターンがあります。一つのパターンは、老後破産とか将来お金がなくなる事に対する危機感を煽って投資の話をするケースですね。あとは、格差について話すパターンや、インフレに負けないように投資を促すパターンもあります。私が個人的に好きではないのは、将来に対する危機感を煽るパターンですね。

岡本: なるほど。もちろんまったくお金がないというのはちょっと問題なので、普通の生活ができるようには準備をしておかなくてはならない。それすらも考えていない人もいるというのが、日本の現実かもしれません。だから、それについては、将来の自分は今の自分が支えているということを認識して、それであればインデックスの積立投資をしていく方がよいですよというメッセージは必要だと思います。それで、その結果としてある時点でいくらになったとしても、その資金を種にして生活をしていく以外、仕方がないですよ。

iDeCo やつみたて NISA が普及するために

水瀬: その時には、iDeCo とか企業型確定拠出年金やつみたて NISA など、いろいろ出てきたのでこういった非課税制度を上手く活用して、少しでも有利に運用しつつ、取り崩しながら暮らしていくことになりますね。

岡本: 逆に、iDeCo やつみたて NISA を盛んに行政が推進し、業界も後押ししている様子を見ていて、また自分達が食べ物にされるんじゃないかという、抵抗感を持っている人たちも結構いるように思いますけど、そのあたりはどんな印象を持っていますか。

水瀬: 私は、つみたて NISA の進め方に、金融庁の本気度を感じています。私たち一般投資家目線まで降りてきて、全国各地で説明会という名の交流会をやったりしているのを見ていて、本気でやっているなと思っています。とはいえ、確かに金融とか投資というと、カモにされそうで警戒する人が多いのは、私も感じています。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

岡本: 金融庁は本気ですよ。でも、私がいつも金融庁に言うのは、国民の間の危機感と、投資の必要性が十分に理解されていない。だから、つみたてNISAを活用すると有利ですよといくら言っても、「本当にそうなのか」、「なんでそんな事しなければいけないのか」、という部分が十分に認識されていないんですよ。

確かに懇談会などをやっているのは良いことだと思うんだけど、ブロガーは、もう一般投資家ではなくマニアなんだと思います。そうではなくて、株なんて危ないから近づいてはいけないと思っている人たちに、どうやって必要性を気付かせてあげられるのか、金融庁はこれを考えなくてはならないと思っています。

それに対して私は、「年金だけでは皆さんの老後の生活はまかなえないんですよ」ということ、「若い時から、自分で少しずつでもお金を増やす努力をしていかないといけないよ」ということを、はっきりと言うべきだと思っています。だけど、誰も言わない。

水瀬: はい、そうですね。言えないんでしょうね。

岡本: まあ、そうですね。それでも、まだ金融庁は言いやすい立場だとは思いますが。厚労省はなかなか言えないと思いますけどね(笑)。そうは言っても彼らが失敗したわけではなくて、日本が成熟してそうなただけの話であって、首相のせいでも、厚労省や金融庁が悪いわけでもないんです。

やっぱり現実といかに向き合うか、それをきちんと伝えてほしいと思っているんですけど、これが大きく欠けている部分だと感じています。こういう意識が普通の人たちに芽生えていないから、一生懸命に言われれば言われるほど、なんか騙されそうだという方向に進んでいる部分があると思っています。

いまの給料はいまと将来の生活のため

水瀬: そうですね。では、ごく普通の人たちには、どのように伝えていけばいいのでしょうか。

岡本: いま貰っている給料には、退職後の生活のためのお金が含まれているんだということをちゃんと理解してもらうことでしょうか。そのために、一番よいのは、首相は無理だとしても、厚労省か金融庁がしっかりと説明するべきでしょう。

水瀬: 私も微力ながら、無料のブログで情報発信をしたり、たまには本にまとめて書いてみたりしていますが、それらを通じて、何とか投資の必要性や、やり方を発信していけたらいいなと思っています。

先ほど、早期リタイアの話をしました。リタイアをしてダラダラとしたいわけではなく、この分野で情報発信をする時に、金融機関などに勤務していて、生活がかかっているとつい手数料の高い商品を勧めるといった誘惑に駆られてしまうかもしれません。そういうのとは無縁の



長期投資仲間通信「インベストライフ」

所で伝えていきたいと思っています。そのために自分の仕事には一区切りをつけ、そういう活動をしていきたいと考えています。

プロではないのでおこがましいかもしれませんが、実践者の立場からの啓発活動もあるんじゃないかと思っています。成功者の声というか、近所のおじさんが上手いこといったらしいと、そんな観点から伝えていきたいと思っています。

岡本:それは素晴らしいですね。早期リタイアを早めてもらわないと(笑)。

水瀬:それは相場次第かもしれません(笑)。

岡本:私は、資産形成は18歳くらいから始めるのがよいだろうと思っています。それと、全ての企業が、所得の3~5%をグローバルな株式インデックスファンドで払うというのがよいと思っています。

水瀬:なるほど。そうですね、強制的にね。

岡本:実は、今だって、一定の額を年金という形で必ず取られているわけで、それを株式のファンドにすればよいただけなんですよね。だから、個人からみれば、可処分所得がすごく減ってしまうわけでもないんですよね。

水瀬:確かに、年金基金だったりすると、マニア以外の一般の人には、運用先がなかなか見えないうですよね。それが運用されている先が見えるようになるのは良いことですね。

岡本:まだ、確定給付型年金のイメージがずっと残っているから、GPIFが損した、得したという話で大騒ぎしているけれど、さっきのグローバル株式インデックスファンドを全員が自動的に買うとしたら、GPIF自身が限りなくゼロに近いコストでやればよいと思います。

水瀬:良いアイデアだと思います。それで、グローバルに分散された株式ポートフォリオを持って、そういうのが普通になったうえで、額を増やしてみたり、個別株でアクティブに投資したりするのは、アリだと思いますね。コンビニに売っているマネー誌には、個別株やFXの事ばかりが書いてあって、パッシブな投資の事が書かれていないので、みんな投機の方に向いてしまっているんで、まずは基本として長期分散投資をやったうえで、やりたい人は自分で、プラス・アルファを取りにいくというのが自然な形だと思います。

岡本:あくまで個別銘柄運用はトッピングですよ。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

水瀬: セイラー博士の行動経済学によると、デフォルト設定の商品を分散型の商品にしてあげば、変えるのが面倒臭くなって、変える抵抗感を活用することで、止めさせないようにすることになるかもしれませんね。

岡本: 確かにアメリカのケースなどではオプトアウト式にしておくとも最初の時点の加入率が9割で、その後も少しずつ増えるんですね。逆に希望者が加入するというオプトイン式だと最初は6割くらいでその後もあまり増えないという話を聞いたことがあります。

更にセーブ・モア・トゥ・モローという考え方で、給料の上昇分の何%かを投資していきましようという形にすると、可処分所得が減らない形で将来のための投資を増やしていけます。気がつくとも結構な額になっているというのもありますよね。

何か普通の人たちが抵抗感なく自然に受け入れられる形の制度が必要ですね。

水瀬: それはよいですね。仕組みにしまえばよいですからね。私はそういう会社で働きたいですね(笑)。

独立したアドバイザーの必要性

岡本: 結局、そういう制度が出来上がっていくにしても、アメリカの例を見てみると、そこでIFAの役割や活動が重要になってきますね。これが日本ではなかなか定着しないんですね。我々がよく知っている方たちは、独り立ちして一生懸命にやっている人ばかりですが、でもほとんどのFAやFPは金融機関に所属していて、企業の営業行為をしている。これが変わっていく以外、方法がないんじゃないかと思います。

水瀬: 岡本さんが言われたインデックスファンドの話だったり、増えた給与から投資に回す話だったり、そういう仕組みでいける部分以外の、本当に草の根まで行き渡らせるには、IFAのような存在が必要になってくるということですね。

岡本: やっぱり証券会社で口座を作ると言っても、証券会社には入りにくいと思っている人は多いですね。悪魔の住処に入っていくような(笑)感じを持つ人もいます。難しい話を聞かされて、「ではここにハンコ押してください」と言われても、怖いんですね。本当にハンコ押していいのか不安になると思います。それはそうですね、元々にあまり良いイメージが無いんだから。そういう時に、隣に誰か信頼できる人が付いてくれて、「これは大丈夫ですよ」とか、「ここはもう少しよく考えた方がよいところです」とか、そういうアドバイスをくれるととても安心できる。FPよりももっと前の段階であっても、そういうのをやれる人がいたらよいなと思います。

水瀬: 私も身近な人なら、そういうサポートは実際にしていますね。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

岡本: アメリカでは、AFC と呼ばれる人たちがいて、FP よりももっと前の段階のヘルプをしてくれるんです。それで、これは国家資格だそうですが、勉強するための費用は国が出してくれる。その代わりに、このサービスを行うことで料金を取ってはいけないものなんですね。こういうのが、日本にもあれば良いと思いますよね。

水瀬: そうですね。私はもし日本で始まったら、それに応募しますよ。

岡本: やってみたい人は本当に沢山いると思います。例えば、証券会社の人たちだって、退職すると大体まともな人になるんですよ(笑)。

水瀬: でもそうやって金融機関で実務経験と知識がある方が先ほどおっしゃっていた案内役を生活費を稼ぐのとは別の活動として、地域や社会貢献という意味でできる範囲でやるというのはいい姿ですよ。私もやりたいな。

岡本: 時々、昔の悪い癖が抜けていない人もいるだろうから、そこは気を付けてほしいですけど(笑)。口座を開くくらいなら、別によいかなと思いますよね。一般の人の中には、投資について興味はあるけど、そういう人がいないから一歩踏み出せないという人は、結構、多いと思います。つまり、やらなきゃという認識が十分に足りていない部分と、やろうと思ったときに、いざ踏み出すことがなかなかできないということになると思います。

値下がりにしたときの対応

水瀬: 一点だけ懸念というか課題があると思うことは、ブログなんかをやっているとコメントを送ってくれる人も結構いるんですね。今のようによい相場だとみんな上機嫌で「情報提供ありがとうございます。言われた通りにしたら、上手くいきました。感謝しています」なんてメッセージをたくさんいただくんですが、これが下げ相場になったり、暴落が起きたりすると、先程の人たちが豹変して、罵詈雑言の嵐に変わるんですね。

本当にここでは言えないような事を書かれることもあります。それで、知り合いの FP に聞いてみると、そこまで辛辣な事を言われるケースが思ったよりもなかったもので、私のような無償の掲示板のようなところに、集中してくるのかもしれないと思っています。そうすると、先ほどの AFC の方が利益とは関係なく無償の部分でやっているところには、そういう事が起こらないように、あくまで自己責任なんですという説明をどのようにするか、大きな問題だと思います。

やはりお金が絡むと豹変してしまうので、アメリカの先行事例を参考にしたいですね。それを契約で縛るのか、それとも勉強から入って、最後に付き添うのか、興味がありますね。そこを間違えてしまうと、志のある方が傷ついてしまうことになるので、そこをすごく心配しています。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

岡本:これは難しい部分ですよ。では、勉強させたらそういう事を言わないか。多分、勉強した事が無駄だったと言うでしょうね。金融機関に対しては、文句は言いにくいというのはありますよね。大体門前払いになるケースが多いから、もう二度とやるかと思って、罵詈雑言は出てこないのかもしれない。だから罵詈雑言が出ている方は、可能性は残っているとも言えますね。

水瀬:確かに。考えようによってはそうかもしれませんね(笑)。

岡本:だから、下がった時にどう対応していくかがすごく重要です。販売サイドと絡んでいない場合は特にそうだと思います。

水瀬:でも、下がってしまって売りたいと思った時にこそ、ちょっと待った方がよいかもしれませんよ、というサポートが必要なかもしれませんね。やはり投資している人は孤独なので、支えてくれるような声が必要になるときがあるんですよ。それを一人で悶々としていると、不安になって売却ボタンを押してしまう。だから、そのサポートは重要なんですよ。

超長期の株価データの効果

岡本:アメリカのケースだと、19世紀の始めくらいからの株式の指数を見せながら、株というのは長期で持っているとき大きく下がった時があってもだんだんと戻るんだと、そういう事を実感させると、長期投資家を増やす効果があるのだと思います。

水瀬:最高のグラフですよ。200年で70万倍、100万倍ですからね。

岡本:日本にはそういうグラフがないんですよ。だから、いま明治大学に株価指数研究所というのを作って、1878年以來の株価を全部洗い出して貰っています。それで一貫した指数が来てくることを期待しています。

それで、意外と知られていないのは、終戦翌月の1945年9月位から1949年の5月まで取引所は閉鎖されているんですけど、集団売買があった。それで株価指数もあるんですね。で、この間、株価は10倍になっています。

戦争で負けて復興している中で、取引所が再開すると大暴落するんですけど、その後、朝鮮戦争で復活するとか、そういったいろいろな局面で暴落したり盛り返したり、そういう長い歴史を見せてあげるの、すごく大きな効果があると思っています。

特に対数グラフで株価チャートを見ると、相当下がったなと思う時も、ほんのちょっとだけの下げなんですよ。それで騙しているわけではないけれど、それが現実ですからね。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

今度の本もそうですが、ブログの方でも、難しい部分と、もうちょっと入り口に心のケアの話があるとよいですね。暗黒史の更に前、口座開くときにどんな不安があったかみたいなストーリーって結構よいかなと思いますよ。

水瀬: 次に本を書くことがあれば、そこから書こうかと思います。ドキドキの資料請求ボタンからになりますね。

岡本: 最初の一步のところから解説があると、非常に面白いと思いますよ。ますます、水瀬さんはじめとして志のあるブロガーさんたちが活躍してくれるのを期待しています。そんなところで、本日はどうもありがとうございました。